

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

朝魯孟格日勒

【所属】(助成決定時)

神戸大学大学院国際文化学研究科 国際文化学研究推進センター

【研究題目】

清代外モンゴルにおける牧地紛争の研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、清代(1636-1911年)外モンゴルにおける牧地紛争の発生と処理過程を検証し、清朝の対モンゴル統治策たる盟旗制度の一環として実施された盟(行政単位の名称。盟は複数の旗より構成され、部とも呼ばれる。)や旗の境界画定政策を解明することである。従来の研究においては、清朝政府による政策や行政区画の視点から牧地問題を考察したものの、(1)盟・旗の牧地境界が具体的にどのように画定され、当時の遊牧民がモンゴル遊牧社会における歴史上初めての出来事となる境界画定とどう向き合ったのか、(2)当時の牧地紛争がいかなる理由で勃発し、またいかなるパターンで展開して、最終的にいかにして解決されたのかといった諸問題が解明されていない。これらの問題の解明は、清朝による外モンゴル支配強化の実状や牧地紛争の実態を検討する上で、重要な作業となろう。

上記の問題点に鑑みて、本研究では、主として外モンゴル東端に位置するセチェン・ハン部の牧地境界、とりわけセチェン・ハン部とトシェート・ハン部間の盟界画定過程の解明といった課題に取り組む。

【研究の内容・方法】(800字程度)

上述した研究目的を達成するため、清代外モンゴルの東部2盟であるセチェン・ハン部とトシェート・ハン部との間の盟界画定経緯に関しては、以下の2点から検討した。(1)乾隆37(1772)年のシレー・ノール会盟におけるセチェン・ハン部の牧地状況を俯瞰した上で、セチェン・ハン部が乾隆46(1781)年の盟界画定の対象地域とならなかった理由を考察した。(2)セチェン・ハン部とトシェート・ハン部間における牧地紛争の発生、処理過程等を詳細に分析し、両盟間の盟界は、いつ、いかなる経緯で画定されたのかを検証した。その際、西部3盟の盟界画定状況と比較検討しながら、どういう人物がその画定事業に携わり、どの地域で牧地境界のオボーが設置されたのかを考察した。

本研究で取り入れた研究手法として以下の3点が挙げられる。(1)長期にわたって生じた牧地紛争の事例に関する全ての公文書史料を逐一入手し、その内容面での詳細な実証研究に取り組んだ。主に、モンゴル国立中央文書館での史料調査を通して入手した、清代外モンゴルの東部2盟間で発生した牧地紛争に関するモンゴル文と満洲文の一次史料を用いた。その史料は、主に該文書館での所蔵フォンド(整理番号)がM-31、M-9、M-10に当たる文書群であり、それぞれセチェン・ハン部盟長衙門、トシェート・ハン部盟長衙門、トシェート・ハン部副将軍衙門の公文書から構成されているが、東部2盟の盟長間、盟長と諸旗間等でやり取りされた公文書である。(2)新たな公文書史料を文面上から解読・分析するに止まらず、当時の牧地図を併用した。ベルリン州立図書館所蔵の当時の牧地図等も利用しながら、実際に争われていた牧地や画定された盟界となるオボー(石積み)の位置状況を示した。(3)牧地紛争と盟や旗の境界画定の問題を、単一的な視点ではなく、総合的な視点で捉えることとし、牧地紛争と境界画定との相関関係の考察に力点を置いた。

【結論・考察】(400字程度)

本研究によって得られた結論は、以下の通りである。

清代外モンゴルにおけるセチェン・ハン部の盟界画定経緯に関しては、(1) セチェン・ハン部における牧地不拡張や牧地問題・紛争の隠ぺいといった状況が、セチェン・ハン部を乾隆 46 (1781) 年の盟界画定の対象地域外へと導いた大きな要因であること、(2) バトラによる西部 3 盟間の盟界画定と同時に、東部 2 盟であるセチェン・ハン部とトシェート・ハン部との間でも盟界画定の交渉は水面下で行われていたこと、(3) 西 3 盟と同様に、乾隆 55 (1790) 年にラワーンドルジらの 2 人の在地モンゴル人王公によって東部 2 盟間の牧地境界が初めて画定され、両盟間の牧地紛争は収束すると同時に、その係争地はトシェート・ハン部へと返還され、中旗とその接する旗を除く諸旗間における新たな牧地境界として計 77 対のオボーが設置されたことがわかった。かくして、従来の研究における西部 3 盟の盟界画定に、本研究で考察した東部 2 盟の盟界画定過程を加えることによって、外モンゴル 4 盟の盟界画定事業は概ね乾隆 55 (1790) 年によく終了したことが明らかとなった。